

「日本幼児保育史」研究余滴(四)

——年表作成にあたって——

遠藤 明子

私にとって、これまで、年表の利用は必要事項の年代を確認するだけで、研究上の単なる補助的な道具でしかなかった。しかし、年表はもっと利用されてもいいはずであるし、通して読むものであってもいいのではないかと思っていた。

「日本幼児保育史第六巻」所収の年表作成が、私の担当と決まり、前に述べたような私の希望が生かされた年表を作りたと思った。まず、日本の幼児保育に関する重要な事項が網羅されていて、保育の動向がつかめるようなものであってほしい。次に、どの頁から読み始めても一応量感をもってせまるものであってほしい。こんな願いをもって、この数年をすごしてきた。

ところが、実際に作成する段になると、正直のところどこから手をつけてよいか、皆目見当がつかなかった。これまでにも、幼児教育や保育史に関する年表はいくつか作られてはいるが、私がこれから作ろうとしているものと全く同じものはなかった。そこで、従来のものを土台としながら、新たにとりくむよりほかなかな

った。それからは、あけてもくられても、年表のことが頭からはなれなかった。

既成のものは、それぞれ製作者の意図や年表の位置づけが異なりして、事項の表現もさまざまであった。私の担当する年表は、大筋としては、明治、大正、昭和(二二年まで)に亘り、三項目(史実、思潮と文献、関連事項)に分類し、年月順に記載していくことになっていた。原稿は、一年につき二枚(半年づつ)使用したが、基本的な事項を記入しながら、この年表はこの年表なりの表現で一貫すべくすめられた。しかし、いつのまにか調子が乱れ、最初から目を通さねばならなかった。とにかく記入しておいて、後でじっくり^{かた}鉤をかければという一縷の望みを抱いて、荒けずりなものでもとにかく作らねばと先を急いだ。といっても、どんな作業が進んだわけではない。最も能率があがったのは、休暇中来る日も来る日も学校の研究室に通った時であった。

しばらくそうこうしているうちに、頭の中も整理されてきて、いろいろなことが見えてくるようになった。既成の年表にも、たまに不審な点が発見され、念のためこれ以後に出版されたものを見て同じであった。とうとう資料にまでさかのぼったり、文献に直接あたって確認した。かくて、たった一つの事項の正確を期して、何日も何時間もかかってしまうことも再三あった。親亀がこけると手亀、孫亀もこけるとはこのことであろうか。誰かが気づいて訂正しなければ、何回でも誤記されていくのである。また明らかに印刷のミスと思われるものもあり、その訂正に時間をかけながら、ミスの恐さをつくづく感じたことであった。また、一つの事項確認のために、見たいと思っていた文献を古書店のカタログの中から見つけ、手許にあってもよい本だったので、早速注文して手に入れた時の喜びはひとしおであった。この年表の中のたった一行におさまってしまうものであっても、この一行は私にとって燦然と輝いているかの如くであった。

そうこうするうちに、出版社から原稿締切りの期限をいつまでできるだけポリウムのある、そして体裁の整ったものを中心がけたものの、いつになってもこれでよしという決め手はでてこなかった。出版社の指定した期限は切れたが、とても手渡せるような原稿は出来上らなかつた。とうとう五月の保育学会には間

に合せたいという最終通告があり、心残りながら原稿を渡していった。もう少し手をかけてと思っただけだったが、そうはいかなかった。人生すべてそうかも知れないが、これで完璧という時は一向に来ない。求めても求めても際限がない。このような思いで作って来た年表である。

この年表は、幼児保育の研究者、教育者、学生ばかりでなく、児童福祉関係やひろく日本の子どもの問題に関心のある一般の方々によって大いに利用され、またこれを土台にしてより充実した年表が作成されることを願っている。

終りに、年表の作成を通して私なりに多くのものを得ることが出来たということをし添えておきたい。まずは、明治、大正、昭和にかけての保育の流れをしっくり見つけることにより、日本の子どもの保育が発展するための苦悩、先駆者たちの並々ならぬ貢献、世相の反映等を、つぶさに読みとることができた。ともかく、何代かに亘る日本の幼児の保育が、ある時は陽のあたる場所におかれ、ある時は全く日かげにおしやられていた事実を目のあたりにし、歴史の重みというものを身にしみて感じながら、現代日本の幼児保育に深く思いをはせる今日この頃である。

(日本女子大学)